

第 10 回韓日未来フォーラム参加レポ

大阪大学外国語学部朝鮮語専攻 中原里沙

今回第 10 回韓日未来フォーラムに参加し、私は初の参加であったのだが非常に充実した 3 日間となった。友人たちが実行委員等であったことが参加のきっかけであり、こういった交流の機会に一度参加してみたいという気持ちも以前からあった。

私が今回のフォーラムで話し合った内容は日本軍慰安婦に関してである。話し合いの題材にはこの他にも、日韓未来アジア希望キャンプ（ハノイ）、日韓領土問題、朝鮮民主主義人民共和国との関係、大学生活があった。私は外国語学部で朝鮮語を専攻し、普段から韓国語には触れているのであるが、歴史に関してはかなり疎い方であり、歴史関係の問題について話し合うことは難しいかもしれないと少し躊躇していた。しかしながらこのフォーラムをきっかけに、興味、関心を持つことができたなら、また学ぶことができたならと考え日本軍慰安婦チームを希望するに至った。大学で日韓の歴史を学ぶ機会も少しながらあり、そういったことを取り上げた文章を扱う授業もあったため、ある程度のことは学んでいたつもりであったし、特に慰安婦問題に関しては前々から気にはなっていた。しかしながら、フォーラムの話し合いに参加し、正直全くといって良いほど自分は何も知らないことを思い知った。授業で扱われているときもほとんど聞き流していたのだらうと思う。それに比べ韓国の学生たちは、非常に慰安婦問題に関してよく学んできていたように思えた。もちろん日本の学生たちの中にも慰安婦問題について少なくとも私よりは詳しい学生はいたが、それは日本全体で考えれば非常にごく少数であるはずだ。韓国語を専攻し、日韓の歴史を学べる環境にいる私が少しの知識しか持ち合わせていない。その他の分野を専攻する学生ならなおさらであろう。これが日本人の若者の現状なのだと実感し、多くのことを感じた。そしてこの慰安婦問題に関する認識の差、そして関心度の違いは何が原因であるのか、どうすればこの差を少しでも縮めることができるのだらうといった方向に話が進んだ。以下、その話し合いの結果かつ最終発表内容をまとめる。

1. 日本側の認識

・日本の慰安婦に関する教育について

日本の歴史教科書では慰安婦に関する記述が5行程度しかない、理系の学生は最低限しか歴史を学ばないためなおさらという意見。また、世界史ではヨーロッパ史が中心であり、近代の日韓関係に関しては学ぶ機会が少ない。さらには、一般的に慰安婦問題の加害者は日本側であるという認識があるため、慰安婦に関する言及が憚られる、資料も少ないという意見がみられた。

・マスメディアが生む認識の違い

マスメディアには映画、ドキュメンタリー等、様々な媒体が存在するが日本では慰安婦を題材にした作品がほとんどない。また、ネットの記事を探そうにも日本人によって書かれた記事のためどうしても偏りが出てしまうという意見もみられた。さらには、人気アイドルが慰安婦バッチを着用していたことが話題を呼んだことを取り上げ、それに対する若者の反応をツイッター上での意見などを通してみたりした。

・日韓合意と河野談話

まず、日韓合意とは2015年の日韓外相会談でなされた日韓間の慰安婦問題の最終的かつ不可逆的な解決を確認した日本政府と大韓民国政府の合意のことであり、日本側は「最終的かつ不可逆的に解決された」としていた。しかし最近になってその合意により設立されたはずの慰安婦財団が解散され、日本側は一度解決したはずの問題を何故再び白紙に戻すのかと不満を抱く結果に。さらに1993年に行われた河野会談では、「政府は慰安婦としてたくさんの苦痛を受けた全ての方に心からの謝罪と反省を示す」など、政府からの公式的な謝罪があったにも関わらず、韓国側はお金ではなく謝罪をと反発しており納得しない日本人が多いことも現状である。

2. 韓国側の認識

・韓国の慰安婦に関する教育について

小学校から教科書に慰安婦に関する内容が掲載されている。また、韓国では慰安婦を子供たちが理解するための機関が市民団体により設立されている。

・マスメディアが生む認識の違い

日本に比べてドキュメンタリーや映画、本などで取り上げられることも多く、人々が触れる機会も多い。しかしながら被害者中心に描かれているものがほとんどで、歴史的認識を促すには足りないという指摘もあった。

・日韓合意と河野談話

日韓合意は、被害者は関係なく政府間だけでなされた合意であったため、様々な非難があった。また河野談話に関しては、もうかなり昔のことだから破談にしよう、関心がない、といった意見が多い。

3. 解決策・案

解決策として YouTube を使ってチャンネルをつくるという案が挙げられた。動画をつくることで自らの意見を発信、そして人々の意見を共有することができるといったメリットを有する。ただアカウントを開設するだけでは関心を持ってもらえないといったこともあり、関心の集まりやすい芸能人関連の話題を取り上げて動画を作成するという提案がなされた。しかしながら時間の関係上実際に動画を作成することはできず、参考程度のすでに作成されている例としての動画を流すことしか出来なかった。

以上が発表内容のまとめである。ただ話し合うだけではなく、発表があったことで解決策までといった話し合いに進み、まとめることができた。日本軍慰安婦問題チームは、実行委員の方をはじめ、通訳、メンバーすべてが素晴らしい人たちであった。日本軍慰安婦問題といったシビアでデリケートな題材にも関わらず、一度も衝突など起こらず、常に和やかな雰囲気で行えた。非常にありがたく思っているし、この出会いにもとても感謝している。

今回日本軍慰安婦問題を題材に韓国人学生また日本人学生とも意見を交換し合うことにより、これまではあまり関心が持てなかった歴史に関心を持ち始めている。これをきっかけに他の日韓問題についても知識を深め、さらにはそういった問題の解決に向けた意見等を発信できるようになればと思っている。



